

とある異世界の竜殺し

五胡逍遥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界バイアシオンにおいて数多の伝説を打ち立てた無限の魂の持ち主ジル

大陸での戦乱に終止符を打ち、いま再び新しい旅路につかんとしていた

書籍とwebの設定ちゃんぽんで進めようかと思っています。

目次

プロローグ	1
カルネ村	4
異変	10

プロローグ

少女は夢見心地に揺蕩たゆたっていた。

そこは深さも知れぬ海のような、果てしない闇のような、茫漠とした空間。

上下の別も無く、触覚も無い、ただぼんやりとした視覚と思考だけが残されていた。

それにいささかの不安も覚えないのはこれが夢であるからか、あるいは既知であるからか。

そう、少女はその場所に見覚えがあった。

それはかつて少女がただの村娘であった頃、そしてそれを境に激変する己の日常のその最後の日であったか。

その空間に泡沫のように浮かんでは消える、見覚えの無い景色や人、あるいは人ならざる存在。

それはこれから己が辿る道程なのだろうかと何とはなしに眺めていた。

「…ル、ジル」

——とそこへ己を呼ぶ声がある、ああそっぴいえば自分の名前はジルだったな、などと取り留めの無い事を考えながら意識を声のするほうに向けると——

そこには一人の少年が立っていた。

「もう、ジルったらさつきから呼びかけてるのに全然返事しないんだもの、僕が分かる？」

黒い衣服に身を包み露出した顔や手だけが白皙の、まるで人形めいた美しさの少年が微笑しながらそう問うてくる。

やや明瞭になりつつある意識の中少女は答えた。

「君の事は忘れたくても忘れられないよシヤリ、で？、これもまた君の仕業かい？」

「ひどいなあ、まるで僕がいつも君に何か仕掛けているような言い草じゃないか！」

まるで拗ねたような顔をしながら、からかうような口調で少年

シヤリは答える、ジルはそれを冷ややかな目で眺めながら言い返す。

「事実じゃないか、僕はもう君のせいで何度トラブルに巻き込まれたか知れた物じゃないよ！」

「それは違うよ、僕はただ強い願いを叶えるだけさ、それがどんな願いであろうとその善悪に関わりなくうち棄てられた願いを拾い叶えるだけなのさ」

「そしてジル、君もまたそういうものだろう、僕はただの狂言回しの道化に過ぎないよ」

「とまあそんな事はどうでもいいじゃないか。重要なのはジル、君が大陸を出て新しい旅に出た、という事さ。そして僕がその手助けをしてあげようじゃないか」

またぞろ何か厄介ごとを持ち込む気だな、とジルは呆れ半分警戒半分に聞き返す。

「手助け？」

「君は新たな世界を冒険したいんでしょ？、だったら僕が水先案内人として新しい世界に連れて行ってあげようじゃないか」

「拒否はできるのかな？」

「言ったでしょ、僕は願いを叶えるだけ。勿論君の心からの願いをね。」

無然としたジルにシヤリは笑いかける。

「ほらほら、そんな顔しないの、こんな大サービスになんて顔してるのさ、喜んでよ。君の持ち物もインベントリに全部収納して送ってあげるからさ、なんなら特典も付けてあげる、着いてからのお楽しみさ！」

「それにさ、これ、前から君に言ってみたくいと思っていたんだよ」

——と、シヤリはにんまりと悪戯な笑顔を浮かべながらそれを口にする

「自由な旅を！」

そうしてシヤリは姿を消し、ジルもやがて意識を手放し深く深く眠りの底に沈んでいく。

かつてバイアシオン大陸において幾多の戦乱を駆け抜け、数多の旅を踏破し、彼の地において無類の伝説を打ち立てた少女が目覚める時

——大いなる魂の物語が再び幕を開ける

カルネ村

エンリ・エモットの朝は早い。

彼女は辺境の山村の娘である、日の出と共に起床し、一日が始まる。いつものように村共有の井戸での水汲みをし、母親の用意した朝食を家族四人で頂き

そうして朝から父母と共に畑仕事に精を出す、十歳になる妹は森の入り口付近で燃料になる枯れ木や落ち葉などを拾い集めていた。

もうしばらくしたら、昼食を取り、午後からまた畑仕事、そうして日が暮れたら家に帰り夕食をとる。その後は家族で団欒を取りつつ針仕事などをして一日は終わる。

これがエンリ・エモットの物心付いた時から十六歳になった今も変わらぬ日常であった、

そしてこれからも大きく変化する事はない、と信じていた日常でもあった。

「お姉ちゃん！」

そこに慌てたような声で妹 ネムが駆けってくる、内心何事かと思いつつ返答する

「もう そんなに大きな声でどうしたの、びっくりするじゃない」

「お願い、一緒に来て！」

エンリは困ったように両親に顔を向けると、父親が頷きつつ言う

「もうすぐ昼だ、朝の仕事はもう大丈夫だから先に行っていなさい、それと何かあつたらすぐに呼びなさい」

そうして駆け足の妹について森の入り口まで付いていった。

ようよう見えてきた森の木陰をネムは指差す。

——とそこには木にもたれかかった人影のような物が見える、慌ててネムを押し留め

自分の背後にやり、用心しいしい近づき誰何する。

だが一切の返答は返って来ない。ネムが服の裾を引っ張りつつ言う。

「このお姉ちゃん寝てるみたいだよ」

その少女は確かに眠っているようだった。

穏やかな顔からは苦悶は見られないし、良くみれば規則的な吐息をしているようだ。

年の頃は自分より2、3上だろうか。このあたりでは見かけない艶やかな黒髪は肩よりやや短め、女性というにはまだあどけなさを残した顔つきだ。

上半身を覆う、鈍い白銀の凱、薄水色のスカートは動きやすさを考慮してか短い上にスリットが入っている、膝上まであるブーツは太ももの白さを強調するように暗色の皮革で出来ている。

どうみてもこのあたりの人間じゃない、時々村に来る冒険者、が一番近い印象だけど

それにしても荷物が少ないのだ、旅をするには小さな鞆に首に提げたもの、そして腰に提げた剣だけ、追いはぎにでもあってほうほうの体で逃げ出しでもしたのだろうか。

それにしてもこのあたりに追いはぎが出るなんてあまり考えられない事だけど。

思案した末、エンリは判断を父親に丸投げすることにした。

「…んん？」

どこからともなく漂ってくる香ばしい匂いに惹かれるようにジルは目を覚ました。

あれ…と寝ぼけ眼で周囲を見回すが状況が掴めない、何故自分は牀ベッドで寝ているのだろうか

「あ、気がついた？」

「君は…」

「私はエンリ、あなたが森の入り口で倒れていたからお父さんに頼んで運んでもらったの」

「僕はジル、…まだ状況が良くわからないけど助けてくれたのならありがとう！」

—見た所、歳も近く悪い娘じゃなさそうだと素直に判断し　ジルは笑いながら言う。

その無邪気な笑顔にほっとしたようにエンリも笑い返す。

「どうかな、これから私たちお昼なんだけど一緒に食べない？」

そうしてジルはエンリの一家と昼食を共にする。

——カルネ村、それが今いる場所の名前だった。

帝国と王国の国境、アゼルリシア山脈。その南端の麓に広がるトブの大森林。

その外れに位置する小さな集落、それがこの村であった。

ジルは、あれ？デインガルとロストール間の山脈は分断の山脈ではなかったか、と

訊いてみたが、返ってきたのは困惑だけであった。

それに南端の森林はルンホルスの森ではなかったかと言うとこれもまた返って来たのは困惑だけであった。

どうもおかしいと更にたずねると、どうやらここはバイアシオンでは無いらしい

そうして帝国と王国とは　バハルス帝国と、リ・エステイーゼ王国という聞き覚えの無い

名前であった。

やがて昼食も終わり、エンリ一家は午後の作業に戻る事になったがジルは、彼女の混乱を察した一家の厚意でしばらく家で休んでいるよう勧められた。

「うう、なにがなんだかw」

と牀で転がっていると、ゴロつと胸にしまわれたものがあたる。
取り出してみると角笛であった。

はて、そういえば僕こんなもの持っていたかな？と疑問に思う。

そこでじーっと観察すれば微かに覚えのある闇の魔力の残滓が漂っている。

ひしひしと嫌な予感をさせつつもスキルによって解析してみる

「センスオーラ！」

すると自分の魔力と反応したのか闇の残滓がむくむくと膨れ上がっていく

やがて闇が晴れ小さな人影が姿を現す、それは黒衣に身を包んだ白晝の人形めいた少年であった。

「やあジル、目覚めたようだなによりだよ」

「シヤリ！」

その瞬間思い出した

「つまりこれは君の仕業ってわけね」

言いつつ剣を抜く

「あははっ、そんなに怖い顔しないでよ、僕は単なる幻さ」

「もう察してると思うけど、ここはバイアシオンじゃない。それどころかまったく別の世界さ」「せっかく君が新しい冒険を始めるといふんだから、全く別の世界を見せてあげようと思ってね！」

「…」

「ま、現状が理解できたならば後は自分で楽しんでよ、自由な旅を！」

言いたいことだけ言って消えようとするシヤリがふと思いついたように口にする。

「ああそうそう、特典について言い忘れてたね」

「それ寂しくなったら吹いてみなよ、面白い事になるから」

じゃ〜ね〜 と言いつつ今度こそシヤリは雲散霧消する。

——あまりに一方的な展開に啞然としてとシヤリを見送ったジルであるが、はっと思い出す

シヤリが贈ってきたアイテムの解析が済んでいない事に。

「……センスオーラ」ややなげやりに呟く

《ゴブゴブの笛》

「……」

なんとなく察したジルは黙って笛をしまい込んだ。

カルネ村

人口はおおよそ120人25世帯からなる村は、リ・エステイーゼ王国辺境の村としては

ありふれた規模だ。

さて現代人にはあまりピンとこないかもしれないが中世というのは食料事情が非常に悪い

特に交通の殆ど途絶えた辺境なら尚更である。

なにかトラブルがあれば即座に食い詰めて一家離散と言うはめに陥る可能性が少なからずあるのである、カルネ村も薬草の採取地という以外には取り立てて特別な産業などあるはずも無く例に漏れない。

しばらく家に滞在してから行き方をきめなさい、そう言われたジルの驚くまいことか。

ジルの生家は両親の代に開拓した貧しい農村である、母を早くに亡くし、父もまた弟が物心の付いた頃に病についた。

それ以後弟を守りつつ必死に畑を維持し、家を守ってきた。やがて弟が成長した頃には父もなくなり、弟と二人で丹精こめた畑は黄金色に輝くジルの宝物であった。

そんなジルだからこそ余所者を住まわせる負担がこの一家にどれほど大きいのしかかるか理解していた。

それでも断らずに厚意を頂戴したのは未練であろうか、かつて自分には味わう事の出来なかった家族の温もり、その一端でも御裾分けに預かりたいそんな気持からだったかもしれない。

こうしてジルのカルネ村での生活はスタートした。

本人はあまり自覚はないが元々ジルはバイアシオンにおいては知らぬ者としておらぬ英雄である、そんなジルが厚意に甘えてばかりではいけないと一家の仕事を手伝うのだから肉体労働で言えば十人力どころの話ではなかった。

朝水汲みに行けば男でも一つがやつとの大甕二つ、片手に一つ軽がると持ち上げ一滴も零さず風の様に走る。

畑に行けば自分の見たことのないラール麦に目を輝かせ、雑草むし

りという半日仕事を一人でわずか一時間で終わらせ一家の目を丸くさせた。

こんな調子で働くのだから村落の評判にならぬわけが無く、数日もすればすっかりジルは打ち解けていた。

そうして一日が終わり就寝前になるとエンリとネムと一緒に部屋で寝物語に興じるのが恒例になっている。

実の所、ジルはこの時間がすっかりお気に入りになっていた。

元々生意気な弟しかいなかった処に急に妹二人が出来たようなものである

しかもとても可愛らしい二人だ、

こんな妹が欲しかった。弟いらね（ペツ、である

尚、弟の名誉チャカ?のためにいえば、実際の所彼は筋金入りのシスコンであり、ジルはジルでややブラコン気味であった。

「ねえねえ、ジルお姉ちゃんまた南の地方のバイアシオンの事教えてくれる?」

「いいよ、ネムはどんなお話が好きかな」

「お姫様の話!」

「ロストールって言う国には光の王女って呼ばれるとっても綺麗なお姫様がいてね——」

——こうしてジルのカルネ村での日々は過ぎて行く——

異変

「ジルさーん、周囲の様子はどうでしょうかー」

「んー今の所は特に問題なしだよ、それと僕の事は単にジルでいいよエンリ」

とスキルくハインドサイト>で周囲を警戒しつつ答える。

鬱蒼と木々が茂り、そこにさらに蔓が絡みつき光の入り込む隙間が殆どない、何処から獣の嘶きが聞こえてくるような、そんな中を一行は進む。

現在ジルとエンリ達はトブの大森林に入っていた。

目的はトブの大森林に自生する薬草である。

カルネ村の貴重な通貨獲得手段ではあるものの、森林内は奥に入れば入るほどモンスターの遭遇率がぐんと増す危険極まりない場所であった。

森林の奥は本来決してエンリが軽々しく立ち入れるような場所ではない。

では何故入ったかと言えばそれはジルの存在である。

毎夜ジルと話すうちにジルが冒険者である事、しかもかなり腕利きのようにだと実際の日々の

働きから感じ護衛を頼みこんだのだ。

当初難色を示したジルであったが、お世話になっっているのに恩返しが出来ない心苦しさとエンリの懇願については折れた。

ネムも当初ついて来たがったが当然却下した。

「ジルーこちらも問題ないゴブよー」

妙にくぐもったようなそんな声で呼びかけられる。

「了解マルーン、ガントとオルナットもそのまま警戒よろしくねー」

「了解したゴブー」 「腹減ったゴブ」

とこれまた妙にくぐもった声で答えが返って来た。



—— 一刻程前

森に入るにあたって流石に二人きりでは不測の事態に対応できないかもしれないと考えたジルは入り口で角笛を取り出し吹き出した。すると眼前にぼんやりとした影が3つ表れやがてはつきりと姿を現す。

それはどう見ても人ではなかった、というかどう見てもモンスターである。

突然モンスターが現われた事にびっくりして腰を抜かすエンリに大丈夫とジルは笑いかけモンスターに向き直る。

「やあ、しばらくぶり、ガント、オルナット、マルーン」

「むむ、突然怪しい子供に呼ばれたような気がしたと思ったら、ジルがいるゴブー！」

「お腹すいたゴブー」

「な、何が起こったゴブー」

「あはは、ごめんね急に呼び出して」

「む、ゴブゴブ団は世界一のパーティーだから忙しいのである、早く用件をいうゴブー！」

「うん、あ、その前に紹介するね」

振り向いていつのまにか木の後ろに隠れたエンリに言う。

「エンリ大丈夫だよ！彼らは僕の冒険者仲間だから」

すると中の一人が傲然と胸を張り言い放つ。

「いかにも！、世界一の冒険者パーティーとは我らゴブゴブ団であり我は団長のガントであるゴブー！」

「そんな事よりお腹すいたゴブー」

「オルナット、団長が大切な事言ってるのにそれは無いゴブー！」

「え、エンリです、初めまして…」

——こうしてエンリとゴブゴブ団は出会った



大森林に入って一時近くは歩いただろう頃、エンリは周囲の様子を注意深く窺った。目当ての薬草の生息する場所を探してだ。そして直ぐに発見できたのは幸運だったのだろう、木々の隙間に繁茂する薬

草を。

ゴブゴブ団二人が先行し、周囲の様子を伺ってから、無言でエンリを招く。

エンリとガントは身を屈めつつ走ると、その薬草の生えた場所まで到着した。

ジルはその間木々を駆け上がるようにして高みに登り周囲を警戒している。

「今のうちに採取すると良いゴブ、このくストラスエッジ>にかけて守ってやるゴブ」

そうして抜き放たれた短剣にエンリは息を呑んだ。

ガントが恐ろしかったわけではない、当初はモンスターという事で恐ろしかったがジルが平然と話しかける様子、そうしてそれに普通に答えるゴブゴブ団の一行にやがて人間味を覚えたからだ。

では何故息を呑んだか、それはガントの掲げた短剣があまりにも神々しかったからだ。

象牙で出来た柄に彫り込まれた精緻な文様に象嵌、刀身の繊細な彫金、この国ではあまり見かけないような曲がりくねった刀身、それらの渾然一体となった美しさも勿論だが刀身から放たれる清浄なオーラには言葉も出ないほど圧倒される、これが御伽噺に出てくる魔法の武器なのだろうか。

世界一の冒険者パーティという言葉も必ずしも大言壮語とは言えないのではないかと思うほどに。

金貨にすればどのくらいになるだろうか、という邪《よこしま》な考えが一瞬頭を過ぎるが即座に頭を振り邪念を追い払い薬草採取に没頭する。

そうして収穫用の袋に一杯つめこみエンリ達は帰途につく

ちなみに道中話していて分かった事だがゴブゴブ団は南の地方の聖杯によって知性を得た、元はこのあたりにも棲息してるゴブリンとあまり変わらない存在という事だった。

◆ 帰途、多少の戦闘はあったものの大過なく、ようやく森の入り口付近まで帰りついた。

と、そこでジルと続いてゴブゴブ団の三人が微かに漂うそれに気付く。

かつて幾たびも嗅いだ事のあるそれは、

「戦いの匂い？」 それもとても嫌な種類の――

「何か燃える臭いと血の臭いがかすかにするゴブ！」

「美味しくなさそうな臭いゴブ！」

そうした4人の様子にエンリも否応なく不安を煽られ胸中にあわ立つ何かを感じる。

「一体何が……」

「マルーン、オルナツトはここでエンリを守って！、ガントは私と一緒にきて、飛ばすよ！」

言うや否や疾風の如く駆け出す。

やがてジルの耳に聞こえてきたのは何かを打ち壊す音や、人の悲鳴、家畜の嘶き。

そうして視界に映ったのは鎧を着た者が村人に剣を振りおろす瞬間、村人は悲鳴を上げて崩れ落ちる。

鎧を着た男は崩れおちた村人に止めを刺そうと剣を再び振りあげ、振り下ろそうと――

その瞬間彼は宙を舞った。

男は何が起こったか分からなかったろう、何故なら彼は吹き飛んだその瞬間兜ヘルムごと頭部を消失してしまったのだから。

村人が切り倒された事に激昂したジルは、白熱した頭で手加減などと言う言葉を完全に消し飛ばし全開で拳を叩き付けた、その結果頭部を消失したそれは十数メートル程とんだ後地面に――

打ちつけられ繰り手を無くした人形のようにくずおれる。

「モルガーさん……」

短い滞在とは言えジルは見覚えのある顔に思わず呟く。

余所者のジルに少々馴れ馴れしくも陽気に何くれとなく構ってくれた人だ……。

見れば深手とはいえまだ息絶えてはいない、そこで治癒魔法を使う。

＜サブキュア＞聖の精霊力3 この世界で言えば第三位階に相当する魔術である。

「精霊よ——」

——ジルの手に白く柔らかな光が集まりそれがモルガーの傷に広がっていく

やがて光が収まった時傷はすっかり塞がっていた。

「嘘だろ…、あんた一体」

己の身に起こったことが信じられないように傷のあった部分をさわる、実感がないのか何度も同じ事を繰り返している。

「一体何があったのか教えてください！」

「あ、ああ俺も詳しい事はさっぱりわからないんだが——」

と言い出してジルを見上げた瞬間固まる、いや正確にはその隣にいる存在を認識して。

ひとしきりパニックになった後ようよう告げる。

バハルス帝国の紋章を付けた騎士が集団で襲ってきた、そうして逃げた所追いつかれ現状の有様だ——と。

「モルガーさんは森の入り口まで逃げてください、そこにエンリもいるので見つからないようにしてください」

「あんたは——」

いいかけて即座に打ち切る、先ほどのやり取りでジルがただの冒険者というレベルではない事を察した為だ。

尚且つ知性あるモンスターを使役できる存在（無論使役しているわ

けではないのだが）である、尋常であるはずがない。

「分かった、あんたも無理はしないでくれ」

そう言つて森へ走り出す。

「さて、ガント悪いんだけど——」

「あなどるなゴブ、我がゴブゴブ団は弱き者の味方ゴブ、それが知性ある存在の努めゴブ」

二人はニヤリと笑いあう。

ジルはガントと二手に別れた、ガントには周辺の様子見と可能なら騎士の掃討をまかせ

己はエンリの自宅を真つ直ぐに目指した、途中遭遇した騎士たちは先ほどの全力パンチに鑑み、第一位階相当の魔法<ストーン>であしらう

「ストーン」そう詠唱すると中空より礫が現われ、騎士に殺到する。第一位階相当とは言え、インフイニティアを宿すジルの使うそれは容易に騎士を戦闘不能に陥れる。

喧騒のなかようやくエモット家の前まで辿りつく

「おじさん、おばさん、ネム！」

お世話になつてる家族たちの名前を呼びながらドアを開ける。

そこにはここしばらくの生活ですっかり馴染みになった三人が怯えたような顔でかたまっていた。

その顔はジルが入つてくると一瞬安堵しかけ、けれど次の瞬間憂慮した顔で問いかけてきた。

「ジルお姉ちゃん！」

「ジルさん、エンリ、エンリは無事でしょうか！」

「はい、森の入り口あたりに非難してます、みんなも急いで避難して

——
言いかけて考え直す。

現在のエモット家の状況はかなり悪い、エンリ達とすれ違いになる

のを恐れ逃げる時間を

逸してしまつたためだ。

そこで思い直し靴<インベントリ>からアイテム<風邪の翼><バリアヴェール><退魔の香水>を取り出す、それぞれ敏捷性の倍加、対魔法、物理の加護、そして姿の隠匿である。

また補充が効くかわからぬ貴重品ではあるが背に腹は変えられぬと遠慮なく三人に使用する。

明らかにマジックアイテムというのがわかるそれらに三人は非常に驚き、身を包む不思議な感覚に効果はきつと本物だろうと納得する。

「森の入り口でエンリたちが待ってる、僕が騎士たちを引き付けるからその隙に脱出して、森まで行けば護衛が守ってくれるから！」

そしてジルは派手に飛び出してスキル<タワーブレイブ><デコイダンス>を使用し敵のヘイトを引き付ける。



ロンデス・デイ・グランブは己の信仰する神への幾度目かの罵倒を吐き出す。

神が本当にいるならまさにいまこそ現れ、邪悪を討滅すべきではないか。何故、敬虔たる信徒であるロンデスを無視するのか。

眼前の邪悪 <ゴブリン>はロンデスの憤懣など意に介さず群がる騎士達を銀光を閃かせる毎に打ち倒していく。

その様をただ眺めるだけで有効な手段を打てず歯噛みしながら眺めるしかなかった。

作戦はいつもどおり手はずどおり進んでいた、この作戦もそう手間取ることなく村人たちを中央に駆り立て、村を焼き、幾人かを除いて塵殺、そうして終了するはずであった、しかし――。

あの瞬間、おくれて広場に逃げ込もうとした村人を切ろうと剣を振り下ろした仲間の一人エリオンが突如現われたゴブリンに、打ち込ん

だその剣ごと体を両断されたのだ。

それは悪夢であった、何故たかがゴブリン一匹に数十人からなる騎士の集団が翻弄されねばならぬのか。

何故ゴブリンの持つ短剣が己が今まで見たどんな魔法武器よりも神聖な魔力を放っているのか、それは神に対する冒瀆ではないのか、何故神はこのような邪悪に神聖な武器を授けるのか――。

神にすがればよいのか、罵倒すればよいのか、もはやロンデスは気がくるわんばかりであった。

「き、貴様らあ、さっさとそのゴブリンを始末しないか！、隊長の命令が聞けないのか！」

そういつてわめき散らす男にロンデスは眉をひそめる。

……ベリユース隊長

だが誰もそれに応えるものはいない、当たり前だ、もはや彼我の戦力差は誰の目にも明らかだったのだから。

動いたら死ぬ、誰もがそう確信して動き出す事ができなかった。そうしてわめき散らす男にゴブリンはゆっくりと近づいていく。

「ひいいいいいー！」

「かね、かねをやる。2000金貨！ いや、5000金貨だ！」

騎士に言っているのか、近づくゴブリンにいつているのか――

だがゴブリンは歩みを止めないし、騎士たちも恐怖から動く事ができない。

そうして『死』がベリユースの眼前にせまる

恐怖に腰を抜かしもはや剣を抜く事も出来ず、只々目をつぶってその時を待つしかなかった。

――だがいつまで経っても『死』は振り下ろされなかった。

代わりに言葉が降ってきた

「おとなしく降伏するゴブか？」

